

# 堀川をめぐる人びと

堀川開削410年をふりかえる

いつも心に川がある  
堀川まちづくりの会企画展

## 風雅たしなむ堀川界限 芭蕉・暁台・士朗・圃暁・若山牧水

水辺には独特の風情が漂う。名古屋唯一の川、堀川の近辺に建つ寺や神社には、いくつもの句碑や歌碑が建てられている。歳月をへて風化し文字が読みづらくなったものや建て替えられたものもあるが、この地が育んだ文化の香りを訪ねてみたい。

### 松尾芭蕉 蕉風は名古屋で誕生

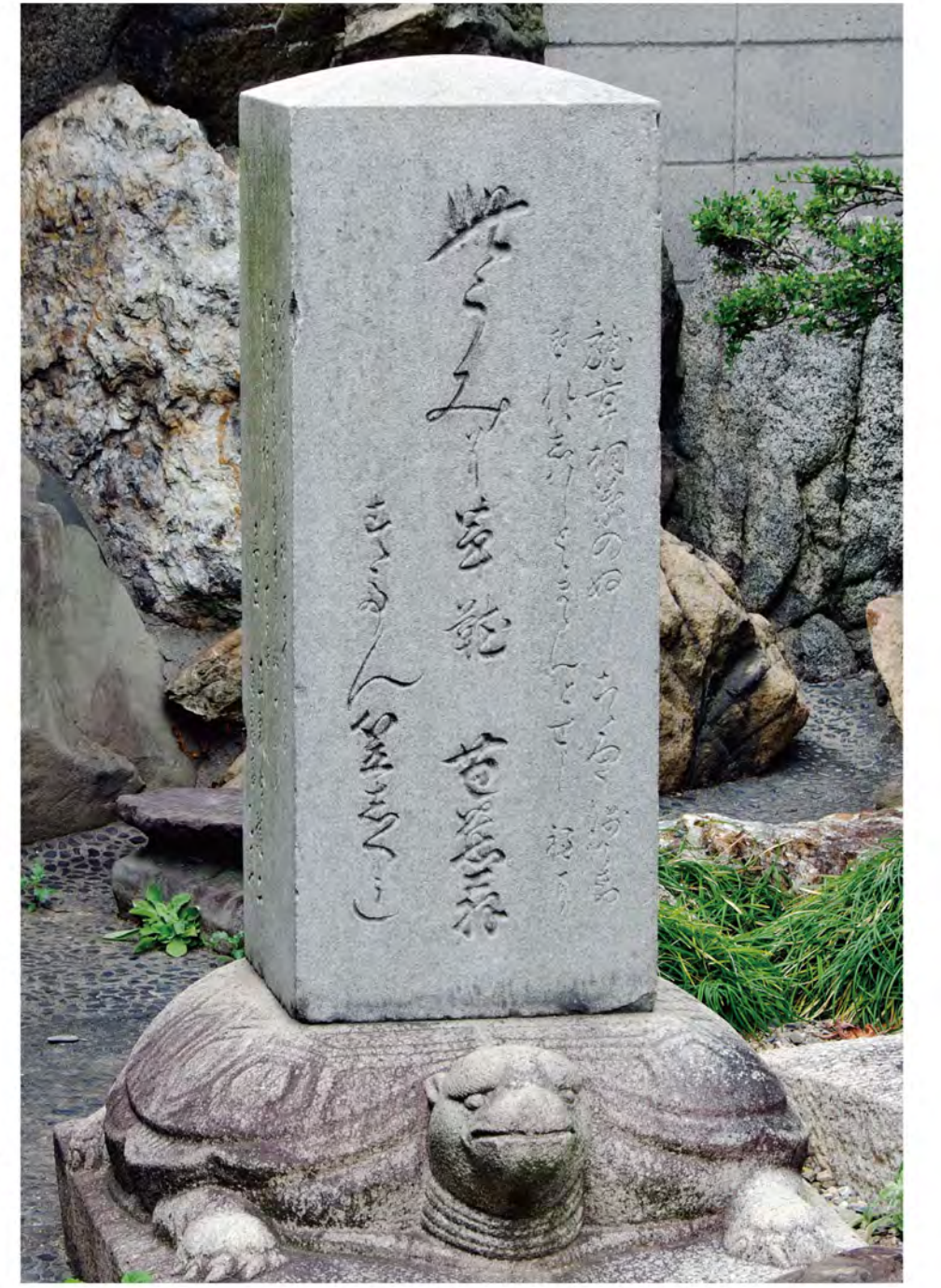
芭蕉は寛永21年(1644)に伊賀国(現:三重県)で生まれ、29歳頃に江戸へ出て水道工事に携わったりして生計を立てながら俳諧師として活動をした。延宝8年(1680)頃になると一流の俳諧師として名を挙げ弟子も増えていった。名古屋は俳諧の盛んな土地柄で芭蕉の弟子が多かった。芭蕉は前後6回訪問して句会を開き弟子たちの指導をしている。

名古屋では「いざ出む雪見にころぶ所まで」、熱田では「海くれて鴨の声ほのかに白し」等の句を詠み、大須観音や妙安寺に句碑が建てられている。

芭蕉はそれまで言葉遊びの要素が強かった俳諧を芸術に昇華した。その発端は芭蕉七部集の第一集『冬の日』で、貞享元年(1684)に今のテレビ塔付近で開かれた句会の句である。芭蕉は元禄7年(1694)に大阪で亡くなった。享年51歳であった。



左端が芭蕉『尾張名所図会』



妙安寺の芭蕉句碑

### 加藤暁台 蕉風へ立ち返れ

暁台は尾張藩士であったが、俳人として立とうと決意して宝暦9年(1759)に藩籍を離れた。芭蕉が亡くなって50年ほど経つと、俳諧は芭蕉がめざしたとは異なる姿になっており、芭蕉への復帰をはかる人々がいた。暁台もその一人で、明和5年(1768)から復古調をめざして『秋の日』の歌仙を巻き、蕪村などに高く評価された。

安永9年(1780)に名古屋を出て琵琶湖畔や京都へ住居を移し、芭蕉追善の俳諧を興行したりしている。寛政4年(1792)に京都で亡くなった。享年61歳。

名古屋の弟子たちは、暁台の墓参りができるように東別院南にある洞仙寺に暁台塚(故郷塚)を造っている。

### 青山圃暁 俳人で暁台の後援者

青山圃暁は古渡の富豪で、俳諧を暁台に学び、暁台の有力な後援者のひとりであった。洞仙寺には師の暁台塚に並んで圃暁夫妻の連句碑が建っている。安永2年(1773)に亡くなった。



左：圃暁と妻の句碑(再建) 右：暁台塚 洞仙寺

### 井上士朗 尾張名古屋は士朗でもつ

士朗は現在の守山区で生まれ、城下で町医者をして後には藩医になった。俳人としてまたたく間に著名となり、弟子も沢山いた。盛名は全国に知られ、「尾張名古屋は士朗(城)でもつ」とまで言われた。

妙安寺(沢の観音、熱田区)には、存命中の文化元年(1804)に岳輅がくろが建立した「万代や山の上よりけふの月」の句碑が残されている。

文化9年(1812)に享年71歳で亡くなった。

#### ❖ 三吟塚

住吉神社の境内に、享和3年(1803)に建立された三俳人の句を刻んだ碑が建っている。

月と雪と 大地のたらぬ 今宵かな 圃暁  
この芦原に 川千鳥なく 暁台  
たのみある 一木は松に あらはれて 士朗



住吉神社の三吟塚



妙安寺の士朗句碑

### 若山牧水 旅と酒を愛した歌人

牧水は自然主義の歌人として名を上げ、紀行文などでも知られている。明治18年(1885)に宮崎県で生まれ、明治41年に早稲田大学を卒業したが、その頃から名古屋の歌人たちとの交流が始まった。

この年に熱田の歌人たちが出版した『八少女』<sup>やおとめ</sup>に5首の歌が掲載され、43年に出版された牧水の第二歌集『独り歌へる』は八少女会(事務所:熱田須賀町)が発行している。何度も熱田を訪れ、堀川岸の法持寺で開かれた短歌会にも出席した。

昭和3年(1928)に43歳の若さで亡くなり、11年に門人が法持寺に歌碑を建てた。「うす紅に葉はいち早く萌えいでて 咲かむとすなり山ざくら花」と刻まれた碑は、宮中学校に今は建っている。



宮中学校の牧水歌碑(牧水自筆)